

早發性癡病ノ身體的症候トシテノ遲脈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38294

示導ヲ與ヘラシタル村上教授及ビ丸山助手ニ深ク謝意ヲ表ス

● 早發性癡病ノ身體的症候

トシテノ遲脈

東京 大久保山田腦病院

井村 勇 作

官能性精神病ノ身體的症候トシテ心臓及ビ血管運動神經作用ノ異常ハ屢々見ル所ニシテ一ハ脈搏ノ變化ニシテ他ハ皮膚細小血管ノ機械的興奮性ノ増進是ナリ而シテ此兩症候ハ總テ神經質個人ガ輕度ノ身體的過勞ノ後ニモ心悸著シク亢進シ從テ脈搏數甚シク増加ス

又皮膚ヲ輕擦スレバ顯著ナル皮膚紋劃ヲ呈ス、必ズシモ一定ノ疾患ニ限リテ表ハル、症候ニアラズ、然レドモ玆ニ脈搏ノ緩徐 Pulsus rarus ナルモノアリテ或ル精神病ノ全經過或ハ一定ノ期間心臓ニハ何等ノ認ムベキ病的變化ナクシテ脈搏數ハ異常ニ減少ス、如斯脈搏ノ緩徐ハ如何ナル精神病ノ如何ナル狀態ニ於テ見得ルモノナリヤニ就テハ學者ノ注意スル所ナリ、

Krafft-Ebing 氏ハ精神病者ノ興奮ト脈搏トノ關係ヲ其教科書ニ記シテ曰ク「躁暴狀態ニ於テモ尙屢々脈搏ノ異常ニ減少シ甚シキハ一分時間ニ二十四トナル事アリ」ト

Ziehen 氏モ亦精神病ト脈搏ノ異常ヲ彼ノ教科書中ニ記載スル所アリ。即チ、脈搏減少ヲ鬱憂狀態ノ患者ニ就テ實驗シ之レニ反シテ躁揚病ニ於テ屢々脈搏ノ著シク増加スルヲ認メ、廻歸病者ニハ其數一分時間ニ十五乃至二十

十ナルモノヲ實驗セシコトアリト唱フ

Krapelin 氏ハ躁癡病ニ於テハ脈搏一般ニ多少増加スレドモ緊張病性昏迷狀態ニアリテハ著シク減少スル事アリト記セリ

是等ノ諸氏ハ其脈搏緩徐ガ一定期間持續スルヤ否ヤニ就テハ何等明言スル所ナカリシガ Krafft 氏ハ千九百〇八年之レニ關スル古今ノ文獻ヲ蒐集シ自家ノ實驗ヲ加ヘテ詳細ナル報告ヲ途ケ Pflüger 氏モ同様ノ業績ヲ公ニセリ又 E. Meyer 氏ハ「早發性癡病ノ身體的症候」トシテ約一週間ニ渡リテ一分間、四乃至五ノ減少ヲ呈セル一例ノ早發性癡病ヲ記載セリ

余頃者早發性癡病ノ身體的症候ニ注意スル間先頃其尿中ニ糖分ノ出現シ精神症狀ノ持續及ビ弛張ト糖分量ト相平行シタルモノヲ認メ「神經性糖尿病ニ就テ附精神病性糖尿病ノ三例」ト題シテ醫事新聞第八百五十八號ニ記載シ置キタリ。今又早發性癡病者ニ就テ脈搏ノ數著シク減少シ稍々久シキ間持續スルモノ、例ニ遭遇シタルガ故ニ貴重ナル紙面ヲ借りテ玆ニ是レヲ記載ス

第一例

静岡縣庵原郡○原村○羽

牧

テ 四十六歳

精神病及ビ神經病的遺傳ヲ認メズ、若年ヨリ神經質ニシテ強健ナラザリシガ著患ナク、擧子七人ヲ有シ流産等ナク微毒ニ感染シタルコトナシト云フ現病歴 明治四十一年六月頃ヨリ氣力衰へ家事萬端ニ無頓著トナリ獨リ一室ニ籠リテ爲スコトモ無ク又深ク憂慮スル所アルガ如クニモアラズシテ空シク月日ヲ消費セリ斯クテ四十三年ニ及ビ四月頃ヨリ何等認ム可キ原因ナク「吾レハ罪ヲ犯セリ、警察ニ召喚セラル可シ、小供モ捕ハレテ獄裡ニ呻

吟ス」ト稱シ舉止不安トナリ。常ニ屋外ニ注意シテ怠タラズ、警官來レリトテ遁ケ隠レ室ニ入りテ戸障子ヲ閉サシ力ヲ極メテ押へ、之レヲ開クザラシメント勉ム夜モ斯クシテ眠ラズ、攝食モ十分ナラザリキ、依テ六月ヨリ十月迄テ某精神病院ニ入院治療ヲ受ケタルモ效ナク常ニ罪業及ビ追跡妄想ニ苦シメラレ居リタリ

翌年四月頃ヨリ妄想ヲ言行ニ表ハサバリシガ深キ沈鬱ニ陥リ一室ニ閉居シテ何事カヲ苦慮憂悶スルモノ、如カリキ、五月一日遂ニ身ヲ井中ニ投ジテ自殺ヲ企テシモ果サズ、同年十一月某所ニ於テ加持祈禱ヲ受ケシニ爾來思想ハ一變シ患者ノ一舉手一投足悉ク皆「神」ニ支配セラレ一言一句總テ「神」ニ關スルニ至レリ、四十五年二月再ビ某病院ニ入り五月迄テ治療ヲ受ケシモ更ニ效果ノ見ルベキモノナシトテ六月九日我大久保腦病院ニ轉院ス

○現症(六月九日) 容姿安靜ニシテ診察ヲ拒マズ、體格中等、榮養稍々不良ニシテ皮下脂肪ニ乏シ、顔貌假面狀ヲ呈シ表情ヲ缺ク、左右均等、纖維搐搦ヲ認メズ、瞳孔兩側正圓同大縮小シ對光反應鈍、調節反應正常、視力及視野、眼底ニハ異常ヲ認メズ、舌運動障礙ナシ、構音亦明瞭、四肢軀幹ノ運動及ビ知覺機ニハ障礙ヲ認メズ、膝蓋廳反射及ビ三頭膊筋反射亢進シ二頭膊筋、橈骨筋等ニ於テ、特異性筋肉萎縮ヲ認ム、内臟諸機官殊ニ心臟ニ異常ナリ、四肢末梢ニ於テ「チアノーゼ」及ビ浮腫ヲ認ムル能ハズ

脈搏坐位ニ於テ中等強サ、正調、六十二至、體溫三十六度二分、體重十一貫四百五十匁

精神症狀 身體各部ヲ診察スル間何等ノ拒絶スルコトナク應答亦正シキチ

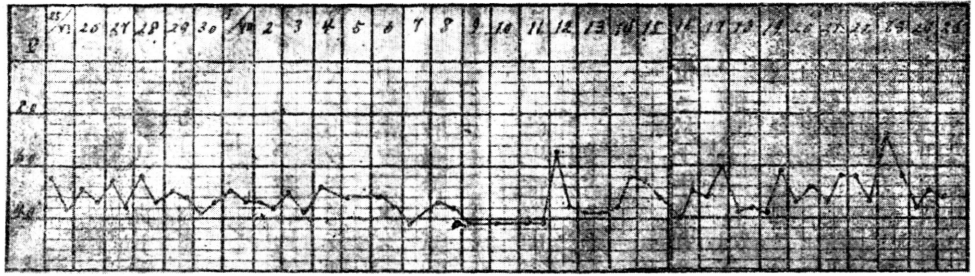
得タリシガ、獨リ腹部ヲ診察スルニ當リテ、患者極力之レヲ拒ミ始メ其ノ故ヲ話サバリシガ暫クシテ曰ク「腹腔内ニ神殿アリテ神坐ス、若シ外部ヨリ壓スルコトアラバ、神殿ハ破壊シ、神ハ逃ケ去ル可シ」「腹内ニハ世界ノアラユル珍寶羅列セラル」ナド語り出シ、尙續イテ纏マリモナキコトヲ縷々陳述セリ、「妾ノ全身ノ筋ハ靈光ヲ發ス」、「拇指ヲ摩擦スレバ物ヲ言フ」「妾ノ顔ニニツノ玉アリテ旭光ヲ發ス」「妾ノ大便ニハ世界ノ地圖ヲ影シテアル」「尿ハ金水銀水ナリ」「妾ノ身體各部ガ或ハ大キクナリ或ハ小ナク變ズ」ト

一般領解力 指南力及ビ記憶力等ニハ著シキ障礙ヲ認メズ、患者ノ言行ノ上ニ些ノ感情運動表現セザルニ依リテ感情ノ著シク消滅シタルモノナルコトヲ推察シ得

六月十五日、入院以來常ニ牀上ニ靜坐シ腹腔内ノ實殿破滅スレバトテ食エズ、強テ勸ムレバ食シ終リテ「食セザリシナラバ」ト嘆息スルチ常トス、糞便ニハ地圖形マレ尿ハ金水ナリ銀水ナルガ故ニ便所ニ棄ツルハ勿體ナキ極ミニリトノ故ヲ以テ坐ナガラニ排尿泄尿ス、脈搏四十四體溫三十六度五分
二十八日、數日來緘黙ト輕度ノ拒絶症狀ヲ呈シ同型ノ姿勢ヲ保チ、兩便坐ナガラニ排泄シ其上ニ平然トシテ坐ス、脈搏正調ニシテ稍々微弱、朝五、十、午後四、三

七月二日、「神」ニ關スル多様ノ妄想ヲ語ル、姿勢及ビ運動ハ同型性ナリ朝食及ビ晩食ハ溫シク攝リシガ其量ハ極メテ少量ナリ

内臟諸機官殊ニ心臟ノ異常、口唇及ビ四肢ノ「チアノーゼ」及ビ浮腫ヲ認



メズ

脈搏微細正調 坐位ニ於テ三十八乃至四十(臥位ニ於テモ變セズ)

九日、茫然 輕度ノ拒絶(食物ニ對シテハ拒絶) 同型症、緘黙、瞳孔兩側同大縮小正圓對光反應鈍、膝蓋腿反射稍亢進、足現象及ビバビンスキー氏症候無シ、手指及ビ舌ニ震顫ヲ認メズ、構音障礙ナシ、眼底ニ異常ヲ認メズ、其他腦壓亢進ノ症候ヲ見ズ、脈搏坐位ニ於テ微弱、正調三十九乃至四十(表参照)

二十三日、妄想ヲ忘レタルガ如ク攝食殆ンド普通、兩便共ニ便所ニテナス、目的モナク廊下ヲ走り廻リ、自室ノ前ニ立チ止マリ、子供ノ如ク唱ヒツ、舞フコト約二十分間ニシテ再ビ廊下ヲ走り戶口ニ行キ「出シテ下サイ」ト云ヘリ脈搏中等強、正調、七十(表参照)、體重十一貫四百匁

第二例

神奈川縣橫濱市〇町〇丁目

田 ハ ネ 二十七歳

家系中ニ精神病の遺傳ヲ認メズ、父母共ニ健存シ兄弟七人内一人不明ノ疾患ニ斃ル、舉子五人内第一第二子ハ流産ナリキ

患者生來強健ニシテ著患ニ襲ハレタルヲ覺エズ、サレバ二十歳頃ヨリ時々輕度ノ頭痛、肩胛部ノ緊迫ヲ感ゼリ

現病歴 明治四十四年二三月頃ヨリ家庭問題ニ就テ甚ダ心勞スルコトアリテ後七月上旬ニ至リ其問題以外ノ些事ニ就テモ杞憂ヲ生シ家人如何ニ其心配ス可カラザル旨ヲ諭ストモ益々深ク憂慮スルノミナリキ、睡眠困難ニシテ食慾亦不進、極マリナキ慾嘆憂慮ニ苦シキ日ヲ送ル間、同月十五日頃ヨリシテ舉止不安トナリ警官來レリトテ逃ケ走り、人ナキニ恰モ人ニ對スルガ如ク、妾ハ大罪ヲ犯シマシタ、ドーカ警察ヘ連レテ行ツテ下サイ、妾ガ行カケレバ良人ノ首ガナクナリ、財産ガ消滅ス、ト云ヒツ、平身低頭ス、又被毒妄想ヲ有シテ食物ヲ攝取セズ、其他患者ノ一舉手一投足悉ク彼カ抱ケル多様ノ關係的、追跡的等ノ妄想及ビ幻覺ニ支配セラレザルハ無シ、斯クテ自宅ノ看護甚ダ困難ナルノ故ヲ以テ同年八月二日我大久保腦病院ニ入院ス

現症(八月五日)容姿安靜 體格及ビ榮養共ニ中等ニシテ浮腫及「チアノーゼ」ヲ認メス、顔貌茫然トシテ作嘔痙攣ヲ呈ス、瞳孔兩側中等同大、對光反應鈍、調節反應普通眼底検査ヲ行フ能ハズ。視力及ビ視野普通、舌運動ニ異常ナク、構音明瞭ナリ、四肢軀幹ニ運動及ビ知覺ノ障礙ヲ認メズ、卵巢痛ハ左側ニ輕度ニ證スルヲ得、膝蓋腿反射稍亢進シ足現象及ビバビンスキー氏症候無シ、

スキー氏症候無シ内臟諸機官殊ニ心臟ニ於テ其大サ及ビ音調ニ變化ヲ認メズ

脈搏微弱 正調七十 體温三十六度八分 體重十一貫百匁

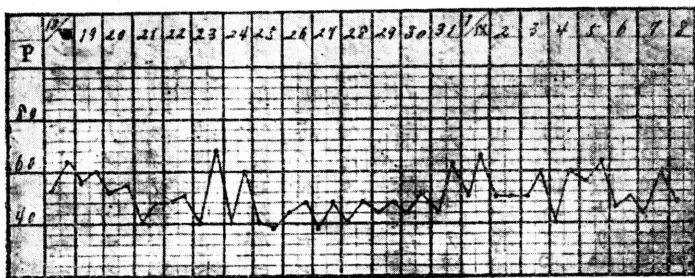
精神症狀 茫然自失ノ態ニテ牀上ニ坐シ間ヲ發スルモ答ナク、再參反問スレバ漸クニシテ答フレドモ簡單ニシテ要領ヲ得ズ、且ツ自家ニ新作シタル詞語ヲ用フ、指南力不確實ナレドモ存在ス、此所ハ病院ニシテ周圍ノ者ハ醫師及ビ看護婦ナレバ承知スレドモ、患者ノ病院ニ居ルハ病氣ヲ治療スル爲メニアラズシテ反テ彼ガ犯セル罪アルカ故ニ捕ハレ來リテ牢獄ノ代リニ入レラレ、近日中ニ死刑ニ處セラレ、モノト意思スルモノ、如シ、斯ク妄想ヲ有スレドモ容姿及顔貌ノ上ニ之レニ相當スル感情ノ表現ヲ認ムル能ハズ、強硬症狀、反響症狀等無シ

八月二十五日、入院以來諸症狀殆ド同様ナリ、患者常ニ室ノ一隅ニ坐シテ動カズ兩便モ其儘ニ排泄シテ便所ニ行クヲ欲セズ、呼ビ掛クルモ決シテ答ヘザルノミナラズ、呼ア方ニ視線ダニ向ケズ、斯クト見ユル間ニ突然立ち出テ、「妾ヲ死刑ニ處スルナラ早クシテ下サレ」毒ヲ飲マシテ殺スノカト云ヒ、或ハ窓外ヲ見ツ、「助ケテ下サレ! 妾ハ殺サレルノダ」ト反復高聲ニ叫ブト思フト忽ニシテ緘默シ、靜坐シ微動ダニセズ數時間ヲ過ス、被毒妄想アリテ攝食ヲ拒ミ又服藥セズ

脈搏三十八乃至四十、微弱ナレドモ正調、口唇及ビ四肢ニ「チアノーゼ」ヲ認メズ、浮腫ナシ、脈搏ノ數ハ坐位ト臥位トニヨリテ異ナラズ、サレドモ起立シ數歩ヲ歩マシムレバ増加シ六十五トナリ中等ノ強サトナル(表參照) 八月二十八日、精神及ビ身體諸症狀同様、脈搏四十二

九月一日、被害被毒追跡等ノ妄想及ビ罪業妄想、幻覺、同型姿勢ハ依然タリ、今朝頭髮ヲ亂シ衣類ヲ脱シ窓外ニ投ケ棄テ素裸體トナリ「殺スナラ早ク殺セ」ト人ナキニ人アルガ如ク迫リ、舉止甚ダ不安ナリシガ暫クニシテ常ノ如ク同型姿勢ニ變ス

脈搏坐位ニ於テ朝五〇、午後七〇(表參照) 中等強度、正調、體重十一貫百匁



以上敘述シタル二例ハ共ニ疑モナキ早發性癡病ニシテ第一例ニ於テハ其脈搏一分時間ニ三十八乃至五十二テ十四日間、第二例ハ三十八乃至五十二ノ遅脈約一週間ニ渡レリ、而シテ余ノ例ニアリテハ Knapp 及ビ Meyer 氏等ノ實驗セシ如ク臥位ト起坐及ビ起立トニヨリテ其數ノ變化ヲ認ムル能ハズ、第二例ニ就テ臥位及ビ坐位ト歩行後トノ差二十乃至二十五ナルヲ認メタリ、又 Kneipoln 及ビ Knapp 氏ハ昏迷狀態ノ精神病者ニ於テ脈搏ノ緩徐ナルヲ證

明シ Ziehen 氏ハ之レヲ沈鬱狀態ニ於テ認ムルモノト稱セリ、然ルニ余ノ例ニ就テ之レヲ見ルニ必ズシモ昏迷狀態ナルコト沈鬱狀態ナルトヲ要セズ

シテ出現スル症候ナルガ如シ

官能性精神病殊ニ早發性癡病ニ於テ一時的ニ脈搏ガ著シク緩徐トナル事アルハ精神病醫ノ屢々實驗スル所ナルベシト雖ドモ四十前後ノ遲脈ガ而モ心臓及ビ其他ノ内臟機官ニ病的變化ナクシテ一定期間持續スル例ハ未ダ多ク人ノ認メザル所ナリ而シテ早發性癡病ニ來ルスル脈搏緩徐ハ如何ニ其理由ヲ説明スベキカ、之レヲ Reichardt 氏ノ所謂腦腫脹 Hirnschwellung ニ基因スルモノトセンカ、余ノ二例ニ於テハ何等腦壓亢進ノ症候ヲ認ムル能ハズ且ツ Reichardt 氏ハ脈搏ノ狀態ニ就テハ何等記述スル所モナキナリ、吾人ハ早發性癡病ノ脈搏緩徐ヲ以テ腦水腫患者ニ證明スルガ如ク腦壓ノ亢進ニヨリテ招來スルモノト考フル能ハズ、然ラバ他ニ或ル機質的變化ノ腦髓ニ存スルニ因ルモノトセンガ、吾人ハ未ダ信據スベキ機質的變化ノ早發性癡病ニ於テ發見セラレタルヲ聞カズ萬一機質的變化ノ腦或ハ神經系統ニ存スルアリテ招來スルモノナランニハ僅一週間乃至二三週間ニシテ其機質的變化ガ容易ク消散シ得ルモノト信ズル能ハズ、然ラズ Meyer 氏ノ説ノ如ク心臟神經ノ官能的異常ニシテ神經衰弱及「ヒステリー」ニ於テ出現スル各種身體症候ト全ク同一ナル理由ノ下ニ立ツモノナリヤ

余ハ少クモ余ノ實驗セシニ例ニ於テ見ルニ一言ニ之レヲ官能的トノミ云ロ放チテ安ズル能ハズ、寧ロ身體一般組織ノ生活機能減弱ニ基キテ起ル現象ナル可キヲ信ゼント欲ス
余ノ二例ハ共ニ食ヲ拒ミ譬ヘ食ヲ攝取スルモ甚ダ僅少ニシテ同程度ノ體格及ビ榮養ヲ有スル健康人ハ勿論、他患者ノ吐モ堪エ得ル量ニアラズ、然ルニ該患者ニアリテハ尙十分ナルモノ、如シ而モ其榮養狀態ハ殆ド全ク衰ヘ

ズ第一例ニ於テハ如上拒食及ビ減食二十日間ニ及ビテ體重ハ漸ク五十匁減シタルヲ認メ第二例ハ十四日間全然同一ノ體重ヲ保持シタリ身體組織ノ活動力即チ生活機能減弱スレバ、之レニ要スル材料モ低減スルノ理ナリ、從テ少量ノ血液ヲ以テ徐々ニ運輸スルモ不可ナカルベシ、之レニ反シテ組織ノ生活機能ハ常ノ如クニシテ心臟神經ノ官能的變化ニヨリテ血液ノ輸送著シク緩徐トナリタルナランハ若シ攝取スル食物ノ量ニハ減節スルナクモ組織ノ榮養ハ不足シ體重ノ減少ハ免レズ、加之直接ニ循環系統ニ障礙トシテ四肢ノ浮腫或ハ「チアノーゼ」ヲ結果スベシ、然ルニ余ノ二例ニ於テハ全ク其等ノ症候ヲ認ムル能ハズ (九月二十九日)

參 考 書

- 1) Knapp, Archiv f. Psych. XLIV.
- 2) Pförtner, Monatssch. f. Psych. u. Neur. XXVIII.
- 3) Reichardt, Centralbl. f. Nervenhelk. u. Psych. 1905, 1. Januar.
- 4) Meyer, Neurologisches Centralbl. 1912, 16. April.
- 5) Kraft-Ebing, Lehrbuch d. Psych. auf klin. Grundlage. 7. Aufl. 1903.
- 6) Krappein, Allg. Psychiatrie. 8. Aufl. 1909.
- 7) Ziehen, Psychiatrie. 4. Aufl. 1911.

